

〔原 著〕

# 産褥期における母親役割の自信尺度と 母親であることの満足感尺度の開発

—信頼性・妥当性の検討—

前原 邦江<sup>1</sup> 森 恵美<sup>1</sup>

Development of the Postpartum Maternal Confidence Scale and the Postpartum Maternal Satisfaction Scale: Reliability and Validity

Kunie MAEHARA<sup>1</sup>, Emi MORI<sup>1</sup>

## 要 旨

本研究の目的は、産褥期の〔母親役割の自信尺度〕と〔母親であることの満足感尺度〕を開発し、その妥当性・信頼性を検討することである。

先行研究から導き出された概念枠組みに基づき、項目案を作成した。母性看護学専門家により内容妥当性を検討し、パイロットスタディーにより表面妥当性を検討した。第一次調査は、褥婦100名を対象に質問紙調査を行い、尺度項目を選定した。

第二次調査は、褥婦115名を対象に質問紙調査を行い、〔母親役割の自信尺度〕(20項目)と〔母親であることの満足感尺度〕(9項目)の妥当性・信頼性を検討した。〔母親役割の自信尺度〕は、正規分布であり、退院時から産褥1か月時に得点が有意に上昇した。また、経産婦は初産婦よりも有意に得点が高く、尺度の内容妥当性を支持している。尺度全体の $\alpha$ 信頼性係数は0.88~0.89で十分な内的整合性が確認された。〔母親であることの満足感尺度〕は、高得点に分布し、退院時と産褥1か月時の再テスト法では $r_s=0.71$  ( $p<.01$ )であり、安定性が確認された。尺度全体の $\alpha$ 信頼性係数は0.80~0.81で十分な内的整合性が確認された。下位尺度については、産褥期の母親役割獲得過程の特徴をふまえて、さらなる検討が必要である。〔母親役割の自信尺度〕得点と〔母親であることの満足感尺度〕得点は、Self-Esteem尺度得点と正の相関、育児不安サブスケール得点と負の相関が認められ、併存妥当性が確認された。また、尺度と下位尺度の相関、〔母親役割の自信尺度〕に関連する要因を検討した結果、先行研究の知見との一致が認められた。〔母親役割の自信尺度〕と〔母親であることの満足感尺度〕は、今後洗練する必要があるが、一定の信頼性と妥当性が確保されたと考えられる。

Key Words : 母親役割, 産褥, 尺度, 妥当性, 信頼性

## I. はじめに

産褥期の母親は、わが子との相互作用の経験を通して母親役割を獲得していく過程にあり<sup>1)</sup>、これらの課題の達成段階に応じた看護援助が求められる。Mercer<sup>2)</sup>は、母親役割達成は、母親が児に愛着をもち、子どもの世話の機能を身につけ、母親としての役割に喜びと感謝の気持ちを表現することとしている。母親の適応を評価する尺度には

育児不安<sup>3)</sup>や育児ストレス<sup>4)</sup>、愛着<sup>5)</sup>等があるが、子どもの成長とともに育児の悩みは異なり<sup>6)</sup>、母親役割の課題も変化すると考えられるため、尺度の適用にあたっては対象や時期を考慮する必要がある。日本では、産褥期の母親役割獲得過程をとらえることができる簡便な尺度は見当たらない。そこで、本研究では、産褥期における母親役割獲得の主観的評価を測定するための〔母親役割の自信尺度〕と〔母親であることの満足感尺度〕を開発し、その信頼性・妥当性を検討することを目的とする。

1 千葉大学看護学部

1 School of Nursing, Chiba University

## II. 産褥期における母親役割の自信と母親であることの満足感を測定する尺度の開発

### 1. 概念の定義と項目案の作成

産褥期における母親役割獲得過程を記述した先行研究<sup>1)</sup>から、[母親役割の自信]と[母親であることの満足感]の概念が抽出された。母親役割の自信は、わが子の育児を適切に遂行する能力についての自信であり、知識・技術の自信、合図のよみとり、要求への応答、自分とわが子に合ったやり方の確立の4つの下位概念からなる。知識・技術の自信とは、わが子の世話に関する基本的な技術を一通りできるという自己効力感である。合図のよみとりとは、日常生活の文脈の中で、わが子の要求（主に生理的欲求）を解釈・推測できることである。要求への応答とは、わが子の要求に回答して、生理的欲求を満たし啼泣しているわが子に対応できることである。自分とわが子に合ったやり方の確立とは、自分とわが子に適した育児方法を見出し、状況に応じて修正・調整できることである。母親であることの満足感は、わが子との相互作用および役割課題の達成から経験する満足感や喜びであり、相互作用の楽しみ、母としての自己肯定感の2つの下位概念からなる。母としての自己肯定感とは、母親としての現在の自己を肯定し、充足感をもつことである。相互作用の楽しみは、わが子との接触やコミュニケーションを楽しむことである。

概念の定義に基づいて、著者が先行研究<sup>1)</sup>で実施した初産婦13名への分娩後から産後2か月時のインタビューから書き起こした表現を参考に、[母親役割の自信尺度]の項目案（4下位尺度、計31項目）、[母親であることの満足感尺度]の項目案（2下位尺度、計14項目）を作成した。回答は、「4. そう思う」～「1. そう思わない」の4件法とした。

### 2. 専門家による内容妥当性の検討

内容妥当性の評価は、修士号または博士号をもつ、母性看護学の教育・研究者4名と、助産師である産褥1か月の褥婦1名の計5名で行った。尺度の概念と項目案を示し、概念を適切に表しているか、表現の不適切点などを指摘してもらい、各項目がどの下位尺度に該当するか、しないかを選択してもらった。返答は、3名は郵送法で、2名は面接で行った。評価者の意見を基に尺度項目の修正を行い、[母親役割の自信尺度]26項目案、[母親であることの満足感尺度]14項目案を作成した。また、構成概念を検討するためのダミー項目として育児不安に関する2項目と、わが子につ

いての認識に関する6項目を作成した。

### 3. パイロットスタディー

表面妥当性は、A産婦人科医院に分娩後入院中の褥婦10名を対象にパイロットスタディーを行って検討した。退院前に、2つの尺度の項目案を含む質問紙に回答してもらった後に、研究者が対象者と面接し、内容や文章表現の明瞭性を確認した。対象者の意見を参考に、項目に修正を加えた。

## III. 第一次調査：尺度項目の選定

第一次調査は、II. で作成した項目案から尺度項目を選定することを目的とした。

### 1. 対象と方法

#### 1) 対象

単胎かつ正期産で分娩した日本人の褥婦で、母児の経過に問題がなく、倫理的配慮の下に研究協力の承諾が得られた者とした。

#### 2) 調査方法と内容

分娩施設からの退院時と産褥1か月時の2時点で、無記名の自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、以下の(1)～(5)である。

- (1) [母親役割の自信尺度]の項目案（26項目）
- (2) [母親であることの満足感尺度]の項目案（14項目）
- (3) 項目案の構成概念を検討するために、ダミー項目として「子育てを離れて一人になりたいと思うことがある」など育児不安を表す2項目を用いた。
- (4) わが子についての認識に関する項目（6項目）：「私の赤ちゃんは、思ったよりも手がかかる」（逆転項目）など、児の気質や行動特徴に対する母親の受けとめを表す質問項目であり、4件法で回答するものである。
- (5) 対象者の基本情報：年齢、初経別、分娩様式、授乳方法、里帰りの状況、育児の相談相手、夫の協力への満足度、児のなだめにくさ等に関する回答選択型の質問項目である。

### 3) データ収集手順

関東地方のA産婦人科医院とB産科小児科病院の2施設で、病棟スタッフに対象基準に適合する候補者を抽出してもらった。研究者が候補者に、調査の趣旨、個人情報保護、自由意思の保障等について個別に説明し、調査協力を依頼した。同意が得られた対象者には、①産褥2～5日目に退院時質問紙（1回目）を手渡し、退院前に回答して回収箱に入れてもらった。②2回目の質問紙調査にも協力を承諾する場合には、添付した封筒の宛先欄に郵送先の住所と氏名を記入して回収箱

に入れてもらった。対象者が産褥3週目に入った時期に、回収した封筒を使って産後1か月時質問紙（2回目）を郵送した。約1週間以内に回答して返送用封筒にて返送してもらった。ケース番号で対象者を識別した。

2. 結果

1) 対象者の概要

質問紙の回収は、退院時101名（回収率77.1%）、産褥1か月時60名（回収率78.0%）であった。そのうち有効回答のあったもの100名（退院時）を分析対象とした。対象者の概要を表1に示す。初産婦が53%、経産婦が47%であった。質問紙に回答した産褥日数は、退院時は平均4.3±1.3日目、産褥1か月時は平均21.9±4.7日目であった。

2) 項目の選定

回答分布から、天井効果・フロア効果が認められ、I-T相関が0.3未満であった8項目（[母親役割の自信尺度]から3項目、[母親であることの満足感尺度]から5項目）を除外した。どちらかに該当した4項目は、下位尺度間相関が0.48～0.59であり、内容の特徴を考慮して削除しなかった。

次に、尺度の構成概念を検討し、ダミー項目を弁別するために因子分析を行った。[母親役割の自信尺度]23項目とダミー2項目の計25項目について、主因子法による因子分析を行い、初期の固有値から因子数5（累積寄与率61.0%）としてプロマックス回転を行った結果（KMO=0.84）、ダミー2項目は第4因子（負荷量0.78, -0.79）に分かれ、除外した。No17, 18, 23は想定した下位尺度と異なる因子に含まれ、「No18私は、赤ちゃんが泣いたときにうまく対処できる」のように意味の解釈が混在すると考えられたため、除外した。除外後の[母親役割の自信尺度]の因子分析の結果を表2に示す。No6, 20は想定した因子への負荷量が低く、No2, 8は2つの因子に対して0.35以上の負荷量を示したが、下位尺度間相関は0.51～0.82であり、質問内容から概念の定義に基づく下位尺度に含めた。[母親であることの満足感尺度]9項目とダミー項目2項目の計11項目について、主因子法による因子分析を行い、初期の固有値から因子数3（累積寄与率57.1%）としてプロマックス回転を行った結果（KMO=0.73）、ダ

表1 対象者の概要

		第一次調査		第二次調査	
		退院時	n = 100	退院時	n = 115
		産褥1か月時	n = 60	産褥1か月時	n = 84
母親の要因	年齢（歳）	29.5 ± 4.3 (18~39)		30.6 ± 4.9 (19~42)	
	初経別	初産婦	53人 (53.0%)	93人 (80.9%)	
		経産婦	47人 (47.0%)	22人 (19.1%)	
	分娩様式	経膈分娩	87人 (87.9%)	100人 (87.0%)	
		帝王切開	11人 (11.1%)	15人 (13.0%)	
	乳幼児の世話経験(初産婦のみ)	あり	17人 (32.1%)	24人 (26.4%)	
妊娠の希望	‡ 予定外だった	11人 (11.2%)	17人 (20.2%)		
授乳方法(産褥1か月時)	‡ 母乳	29人 (48.3%)	27人 (32.1%)		
	‡ 混合	30人 (50.0%)	53人 (63.1%)		
	‡ 人工	1人 (1.7%)	4人 (4.8%)		
環境要因	里帰りの状況(産褥1か月時)	‡ 里帰り中である	19人 (32.7%)	38人 (47.5%)	
	育児の相談相手	‡ いる	59人 (98.3%)	77人 (91.7%)	
	夫の協力への満足度	‡ やや満足～満足	45人 (76.3%)	62人 (74.7%)	
児の要因	児の出生時体重(g)	‡	3061.8 ± 368.6 (2218~3910)	3022.6 ± 337.4 (2344~4242)	
	なだめにくさ	‡ なかなか泣きやまないことが多い	3人 (5.0%)	16人 (19.8%)	
	「わが子の認識」得点(点)	‡	13.5 ± 2.1	12.0 ± 2.4	

‡：産褥1か月時のデータ

表2 「母親役割の自信尺度」項目分析と因子分析の結果

下位尺度	項目 No.	No.の質問項目	第一次調査 (退院時 n = 100)				第二次調査 (退院時 n = 115)			
			因子分析 <sup>1)</sup> 結果				I-T 相関 <sup>2)</sup>	平均値 <sup>3)</sup>	I-T 相関 <sup>2)</sup>	平均値 <sup>3)</sup>
			パターン行列 因子		因子 抽出後の 共通性	I-T 相関 <sup>2)</sup>				
1	2	3	4							
知識・技術 の自信	No.1	私は、赤ちゃんを抱くとき、ぎこちなくて下手 だと思う (逆)		.61		.46	.62	2.67	.53	2.55
	No.2		.41	.42		.59	.76	2.03	.72	2.00
	No.3			.58		.70	.79	2.30	.61	2.32
合図のよみ とり	No.4	私は、赤ちゃんがもうすぐ泣き出しそうなのが わかる。			.51	.23	.32	2.93	.24	2.74
	No.5	私は、赤ちゃんがお腹がすいたときのサインが わかる			.61	.36	.42	2.98	.45	2.76
	No.6	赤ちゃんが泣いている時、なぜ泣いているのか わからない (逆)	.59		.31	.53	.71	2.51	.68	2.34
	No.7				.51	.54	.67	2.37	.62	2.30
	No.8		.44	.39		.51	.56	2.79	.49	2.37
	No.9				.52	.32	.45	2.78	.55	2.48
	No.10				.51	.32	.40	3.39	.45	3.11
要求への応 答	No.11		.76			.61	.74	2.64	.67	2.63
	No.12	私は、赤ちゃんが泣くと、どうしたらよいのか と、とまどってしまう (逆)	.46			.64	.78	2.68	.62	2.57
	No.13		1.05			.72	.70	2.26	.59	2.21
	No.14		.44			.57	.71	2.63	.61	2.50
	No.15		.72			.32	.51	2.06	.46	2.00
	No.16		.45			.58	.77	2.24	.66	2.01
自分とわが 子に合った やり方の確 立	No.19			.65		.59	.71	2.38	.57	2.30
	No.20	教わった方法がうまくいかない時、自分と赤 ちゃんに合っているかを考えて、やり方を決める		.07	.67	.51	.38	3.40	.29	3.03
	No.21	私の赤ちゃんにとって良いと思うやり方を見つ けている	.42			.17	.39	3.07	.30	2.87
	No.22		.89			.47	.58	2.70	.66	2.49

- 1) 主因子法 (プロマックス回転)  
KMO=0.86 Bartlettの検定 p = 0.00  
負荷量0.35以上の値を太字で記載
- 2) Spearmanのロー
- 3) 逆転項目は得点を修正済み

因子相関行列				
因子	1	2	3	4
1	1.00	.76	.54	.26
2		1.00	.57	.27
3			1.00	.06

ミー2項目は第1因子 (負荷量0.86, -0.84) に分かれ、除外した。除外後の「母親であることの満足感尺度」の因子分析の結果を表3に示す。No.6, 7はいずれの因子の負荷量も小さかったが、下位尺度間相関は0.48, 0.74であり、質問内容から概念の定義に基づく下位尺度に含めた。

わが子についての認識に関する項目は、同様の手順で2項目を除外した。第二次調査では4項目を合計して「わが子の認識」得点として扱う。

### 3) 尺度の作成

「母親役割の自信尺度」(20項目)は、次の4つの下位尺度からなる。「知識・技術の自信」は「No.1私は、赤ちゃんを抱くとき、ぎこちなくて下手だと思う」などの3項目である。「合図のよみとり」は「No.5私は、赤ちゃんがお腹がすいた時のサインがわかる」など7項目である。「要求への応答」は「No.12私は、赤ちゃんが泣くと、どうしたらよいのかと、とまどってしまう」(逆転項目)

など6項目である。「自分とわが子に合ったやり方の確立」は「No21私の赤ちゃんにとって良いと思うやり方を見つけている」などの4項目である。合計得点の範囲は4～80点で、高得点であるほど母親役割の自信が高いことを示す。

[母親であることの満足感尺度] (9項目)は、次の2つの下位尺度からなる。「相互作用の楽しみ」は「no.1私は、赤ちゃんとのコミュニケーションを楽しんでいる」など4項目である。「母としての自己肯定感」は「no.6私は、母親であることに満足している」などの5項目である。合計得点の範囲は4～36点で、高得点であるほど母親であることの満足感が高いことを示す。

4) 尺度得点の概要—第一次調査の結果から—

(1) 尺度得点の記述統計

[母親役割の自信尺度]と下位尺度、[母親であることの満足感尺度]と下位尺度について、退院時における各項目の平均値とI-T相関を表2と表3に、退院時および産褥1か月時の尺度得点を表4に、Cronbachの $\alpha$ 係数を表5に示す。

[母親役割の自信尺度]の4つの下位尺度の間には、それぞれ有意な正の相関 ( $r_s=0.44\sim 0.75$ ;  $p<.01$ ) が認められた。[母親であることの満足感尺度]の2つの下位尺度の間には、有意な正の相関 ( $r_s=0.51, 0.63$ ;  $p<.01$ ) が認められた。

表3 [母親であることの満足感尺度] 項目分析と因子分析の結果

下位尺度	項目 no.	no.の質問項目	第一次調査 (退院時 n = 100)				第二次調査 (退院時 n = 115)		
			因子分析 <sup>1)</sup> 結果			I-T 相関 <sup>2)</sup>	I-T 相関 <sup>2)</sup>	平均値 <sup>3)</sup>	平均値 <sup>3)</sup>
			パターン行列 因子 1	2	因子抽出後の 共通性				
相互作用の 楽しみ	no. 1		.47		.21	.41	3.74	.32	3.76
	no. 2		.68		.46	.66	3.41	.71	3.31
	no. 3		.43		.26	.59	3.55	.62	3.47
	no. 4	私は、赤ちゃんとのコミュニケーションを楽しんでいる	.80		.67	.64	3.66	.69	3.50
母としての 自己肯定感	no. 5			.78	.52	.52	3.85	.55	3.82
	no. 6	私は、母親であることに満足している	.11	.29	.14	.43	3.82	.65	3.69
	no. 7		.23	.11	.10	.62	2.69	.53	2.55
	no. 8	母親としての今の私を、自分らしいと思える	.41		.31	.65	3.26	.70	3.13
	no. 9		.69		.54	.64	3.58	.73	3.34

因子間相関.63

- 1) 主因子法 (プロマックス回転) KMO=0.78 Bartlettの検定  $p=0.00$   
負荷量0.40以上の値を太字で記載
- 2) Spearmanのロー
- 3) 逆転項目は得点を修正済み

表4 [母親役割の自信尺度] と [母親であることの満足感尺度] の得点

M $\pm$ SD (点)

尺度	下位尺度	得点の 範囲	第一次調査		第二次調査	
			退院時 (n = 100)	産褥1か月時 (n = 60)	退院時 (n = 115)	産褥1か月時 (n = 84)
母親役割の自信尺度		20—80	53.2 $\pm$ 10.6	60.1 $\pm$ 10.0	49.6 $\pm$ 9.4	53.6 $\pm$ 8.9
知識・技術の自信 合図のよみとり 要求への応答 自分とわが子に合ったやり方の確立	知識・技術の自信	3—12	7.0 $\pm$ 2.5	8.8 $\pm$ 2.4	6.9 $\pm$ 2.2	8.2 $\pm$ 2.2
	合図のよみとり	7—28	19.8 $\pm$ 3.2	22.1 $\pm$ 3.2	18.1 $\pm$ 3.9	20.0 $\pm$ 3.3
	要求への応答	6—24	14.5 $\pm$ 4.5	16.6 $\pm$ 4.1	13.9 $\pm$ 3.9	13.9 $\pm$ 3.8
	自分とわが子に合ったやり方の確立	4—16	11.6 $\pm$ 2.2	12.6 $\pm$ 2.2	10.7 $\pm$ 2.1	11.5 $\pm$ 2.0
母親であることの満足感尺度		9—36	31.5 $\pm$ 3.2	32.0 $\pm$ 3.6	30.6 $\pm$ 3.7	29.3 $\pm$ 4.0
相互作用の楽しみ 母としての自己肯定感	相互作用の楽しみ	4—16	14.4 $\pm$ 1.6	14.6 $\pm$ 1.7	14.0 $\pm$ 1.7	13.4 $\pm$ 1.7
	母としての自己肯定感	5—20	17.2 $\pm$ 2.1	17.4 $\pm$ 2.3	16.5 $\pm$ 2.4	16.0 $\pm$ 2.6

(2) 尺度得点の群間比較

① 初経別の比較

退院時に回答が得られた100名について、初産婦と経産婦の2群に分け、各尺度の得点を比較した。[母親役割の自信尺度]得点は、経産婦は初産婦よりも有意に高得点であった( $p < .01$ )。[母親であることの満足感尺度]得点は、初産婦と経産婦の間に有意差は認められなかった。(表6)

② 退院時と産褥1か月時の比較

退院時と産褥1か月時の両方に回答が得られた60名について、退院時と産褥1か月時の各尺度の得点を比較した。[母親役割の自信尺度]得点は、産褥1か月時には、退院時よりも有意に高得点であった( $p < .01$ )。[母親であることの満足感尺度]得点は、退院時と産褥1か月時では有意差は

認められなかった。(表7)

IV. 第二次調査：尺度の信頼性・妥当性の検討

[母親役割の自信尺度]と[母親であることの満足感尺度]の信頼性・妥当性を検討することを目的とした。

1. 対象と方法

1) 対象と調査方法

対象および調査方法はⅢ-1.と同様である。関東地方のC総合病院産科病棟で、対象基準に適合する候補者を募集した。

2) 調査内容

調査内容は、以下の(1)~(5)である。

- (1) [母親役割の自信尺度] (20項目)
- (2) [母親であることの満足感尺度] (9項目)

表5 各尺度と下位尺度の $\alpha$ 係数

尺度	下位尺度	項目数	Cronback's $\alpha$			
			第一次調査		第二次調査	
			退院時	産褥1か月時	退院時	産褥1か月時
母親役割の自信尺度		20	0.91	0.91	0.89	0.88
	知識・技術の自信	3	0.78	0.82	0.78	0.78
	合図のよみとり	7	0.76	0.82	0.80	0.77
	要求への応答	6	0.86	0.82	0.84	0.85
	自分とわが子に合ったやり方の確立	4	0.57	0.72	0.59	0.56
母親であることの満足感尺度		9	0.74	0.84	0.80	0.81
	相互作用の楽しみ	4	0.70	0.84	0.59	0.58
	母としての自己肯定感	5	0.58	0.72	0.73	0.73

表6 初経別の得点比較

尺度	第一次調査 (退院時)		第二次調査 (退院時)	
	初経別	M $\pm$ SD	初経別	M $\pm$ SD
母親役割の自信尺度得点 (点)	初産婦 (n=53)	47.5 $\pm$ 8.5	初産婦 (n=93)	47.7 $\pm$ 8.9
	経産婦 (n=47)	59.4 $\pm$ 9.0	経産婦 (n=22)	57.9 $\pm$ 6.8
	1) ** p < 0.01		2) ** p < 0.01	
母親であることの満足感尺度得点 (点)	初産婦 (n=53)	31.2 $\pm$ 3.3	初産婦 (n=93)	30.3 $\pm$ 3.8
	経産婦 (n=47)	31.9 $\pm$ 3.2	経産婦 (n=22)	31.8 $\pm$ 2.8
	2) n.s.		2) n.s.	

1) t検定 2) Mann-WhitneyのU検定

表7 退院時と産褥1か月時の得点比較

尺度	第一次調査 (n=60)		第二次調査 (n=84)	
	時期別	M $\pm$ SD	時期別	M $\pm$ SD
母親役割の自信尺度得点 (点)	退院時	56.1 $\pm$ 10.7	退院時	50.1 $\pm$ 10.2
	産褥1か月時	60.7 $\pm$ 10.2	産褥1か月時	53.6 $\pm$ 8.9
	3) ** p < 0.01		3) ** p < 0.01	
母親であることの満足感尺度得点 (点)	退院時	31.9 $\pm$ 3.4	退院時	30.4 $\pm$ 3.7
	産褥1か月時	32.1 $\pm$ 3.6	産褥1か月時	29.3 $\pm$ 4.0
	4) n.s.		4) n.s.	

3) 対応のあるt検定 4) Wilcoxon符号付き順位検定



- (3) 対象者の基本情報：第一次調査と同様である。
- (4) 「わが子の認識」得点：「私の赤ちゃんは、思ったよりも手がかかる」(逆転項目)等、児の気質や行動特徴についての母親の認識を表す4項目であり、4件法で回答し(範囲4~16点)、高得点であるほど肯定的な受けとめであることを示す。第一次調査の結果では退院時および産褥1か月時のCronbachの $\alpha$ 係数は0.70, 0.77であった。
- (5) 併存妥当性を検討するために、(a)退院時用質問紙には、菅<sup>7)</sup>のSelf-Esteem尺度日本語版(10項目)、(b)産褥1か月時用質問紙には、吉田ら<sup>3)</sup>の育児不安スクリーニング尺度—1・2カ月児の母親用—の育児不安サブスケール(15項目)を使用した。

### 3) 分析方法

〔母親役割の自信尺度〕と〔母親であることの満足感尺度〕について、項目分析を行い、信頼性は内的整合性と安定性を検討し、妥当性はグループ既知法、併存妥当性、理論的仮説検証を行う。統計解析にはSPSS 12.0Jを使用した。

## 2. 結果

### 1) 対象者の概要

第二次調査の質問紙の返答は、退院時119名(回収率77.8%)、産褥1か月時84名(回収率81.6%)であった。そのうち有効回答のあったもの退院時115名、産褥1か月時84名を分析対象とした。対象者の概要を表1に示す。初産婦が80.9%、経産婦が19.2%であった。質問紙に回答した産褥日数は、退院時は平均 $5.5 \pm 1.2$ 日目、産褥1か月時は平均 $27.8 \pm 5.4$ 日目であった。

### 2) 尺度得点の記述統計と項目分析

#### (1) 母親役割の自信尺度

〔母親役割の自信尺度〕得点を表4に示す。退院時、産褥1か月時ともに、Kolmogoriv-Smirnovの正規性の検定により正規分布であることが確認された。退院時において、各項目の平均値は2.01~3.13であった。I-T相関は「No.4 私は、赤ちゃんがもうすぐ泣き出しそうなのがある」は0.24であったが、その他の項目は0.29以上であった。(表2)

#### (2) 母親であることの満足感尺度

〔母親であることの満足感尺度〕得点を表4に示す。中央値は、退院時31.0、産褥1か月時30.0であり、高値に分布が偏っていた。退院時において、各項目の平均値は2.55~2.76であった。I-T相関は全項目で0.32以上であった。(表3)

### 3) 信頼性の検討

#### (1) 内的整合性：Cronbachの $\alpha$ 係数

退院時と産褥1か月時における〔母親役割の自信尺度〕と〔母親であることの満足感尺度〕および各下位尺度得点のCronbachの $\alpha$ 係数を表5に示す。

#### (2) 安定性：再テスト法

1回目と2回目の質問紙の両方に有効回答が得られた84名を対象に、退院時と産褥1か月時の得点の相関を検討した。〔母親役割の自信尺度〕について、退院時と産褥1か月時の得点の相関は $r = 0.65$ (対応のあるt検定,  $p < .01$ )であった。〔母親であることの満足感尺度〕について、退院時と産褥1か月の得点の相関は $r_s = 0.71$ (Wilcoxon符号付き順位検定,  $p < .01$ )であった。

### 4) 妥当性の検討

#### (1) グループ既知法

##### ① 初経別の得点比較

退院時に回答が得られた115名について、初産婦と経産婦の2群に分け、尺度の得点を比較した。経産婦は、初産婦よりも〔母親役割の自信尺度〕得点が有意に高かった( $p < .01$ )。〔母親であることの満足感尺度〕得点は、初産婦と経産婦の間に有意差は認められなかった。(表6)

##### ② 退院時と産褥1か月時の得点比較

退院時と産褥1か月時の両方に回答が得られた84名(初産婦66名、経産婦18名)について、退院時と産褥1か月時の尺度の得点を比較した。〔母親役割の自信尺度〕得点は、退院時よりも産褥1か月時の方が有意に高かった( $p < .01$ )。〔母親であることの満足感尺度〕得点は、退院時と産褥1か月時では有意差は認められなかった。(表7)

#### (2) 併存妥当性

退院時において、Self-Esteem尺度得点は、〔母親役割の自信尺度〕得点( $r_s = 0.42$ )、〔母親であることの満足感尺度〕得点( $r_s = 0.45$ )との間に有意な正の相関が認められた( $p < .01$ )。

産褥1か月時において、育児不安サブスケール得点は、〔母親役割の自信尺度〕得点( $r = -0.45$ )、〔母親であることの満足感尺度〕得点( $r_s = -0.65$ )との間に有意な負の相関が認められた( $p < .01$ )。

#### (3) 尺度・下位尺度間の相関

退院時、産褥1か月時ともに、〔母親役割の自信尺度〕得点と〔母親であることの満足感尺度〕得点の間に有意な正の相関( $r_s = 0.51, 0.59$ ;  $p < .01$ )が認められた。

退院時、産褥1か月時ともに、〔母親役割の自信尺度〕の4つの下位尺度得点は、それぞれ有意な正の相関が認められた。退院時、産褥1か月時

ともに、[母親であることの満足感尺度]の2つ  
の下位尺度得点の間には、有意な正の相関が認め  
られた。(図1)

(4) 理論的仮説検証

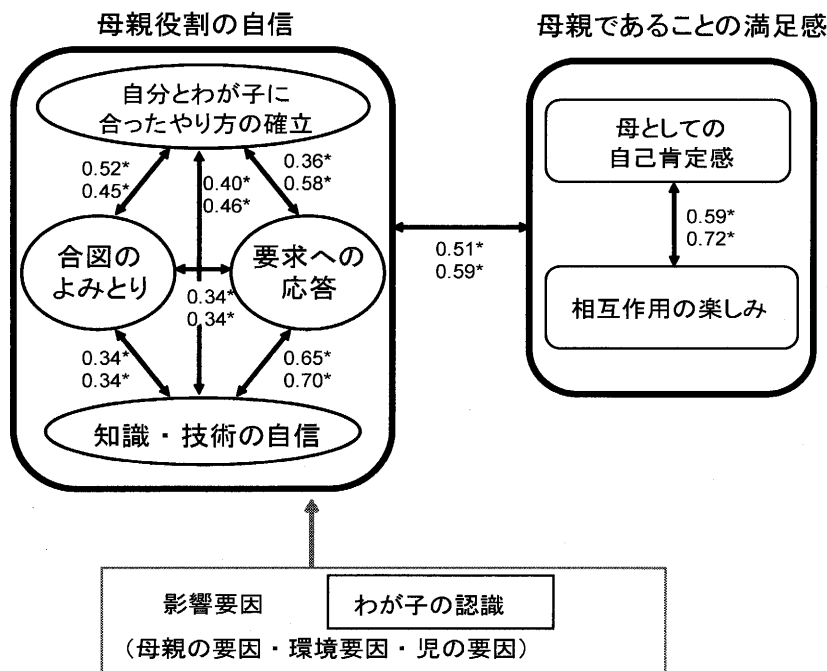
先行研究<sup>1)</sup>から、産褥期の母親が児の世話に関  
する知識・技術を学び、わが子の合図のよみとり  
と要求への応答の経験を通して、自分とわが子に  
合ったやり方を確立していくという[母親役割の  
自信]の概念枠組みが導き出された。母親役割の  
自信は、[母親であることの満足感]につながり、  
母親役割の自信を獲得していく過程には、わが子  
の気質や行動特徴についての受けとめ(「わが子  
の認識」)や背景要因が影響するというものである。  
(図1)また、多くの先行研究により、母親  
役割には、母親の要因や児の要因、環境要因が関  
連することが報告されている<sup>8)</sup>。そこで、産褥1  
か月時の[母親役割の自信尺度]得点を従属変数、  
母親の要因(産褥日数、年齢、初経別、分娩様式、  
乳幼児の世話経験、妊娠の希望、子育ての経済的  
負担感、退院時の授乳法、産褥1か月時の授乳法)、  
環境要因(里帰りの有無、育児の相談相手の有無、  
夫の協力への満足度)、児の要因(出生  
時体重、なだめにくさ、「わが子の認識」得点)  
を独立変数とした重回帰分析を行った。決定係数  
は0.59(p<.01)であった。[母親役割の自信尺  
度]得点には、「わが子の認識」が肯定的である

こと( $\beta = 0.33$ )、産褥1か月時に母乳栄養が確立  
していること( $\beta = 0.24$ )、経産婦であること( $\beta =$   
0.21)、年齢( $\beta = -0.39$ )が有意な関連を示した  
( $p < .05$ )。

V. 考 察

1. [母親役割の自信尺度]について

[母親役割の自信尺度]得点は、退院時、産褥  
1か月時ともに正規分布であった。尺度全体およ  
び「知識・技術の自信」「合図のよみとり」「要求  
への応答」の各下位尺度において、 $\alpha$ 係数は0.7  
以上で十分な内的整合性が確認された。しかし、  
「自分とわが子に合ったやり方」下位尺度だけは  
 $\alpha$ 係数が低かった。分娩後の母親は、知識・技術  
の習得から取り組み始め、わが子の合図をよみと  
り要求に応答することを通して、自分とわが子に  
合ったやり方を探索するというプロセスをたどり、  
母親役割の自信を獲得していく<sup>1)</sup>。Mercer<sup>2)</sup>は、  
母親役割達成には出産後の数か月間はかかると思  
べている。第二次調査では対象者の80.9%が初産  
婦であり、産褥1か月頃では自分とわが子に合っ  
たやり方を確立するところまで至っていない  
ケースも多く<sup>9)</sup>、「自分とわが子に合ったやり方  
の確立」下位尺度の項目に回答しにくいと推察  
される。これは産褥期の特徴を表しているとも言  
えるだろう。下位尺度の $\alpha$ 係数が低く出たのは項



(第二次調査 上段は退院時、下段は産褥1か月時の相関係数 \*p<.01)

図1 尺度および下位尺度間の相関



目数が少ないことの影響も考えられ、検討を重ねる必要がある。〔母親役割の自信尺度〕全体では $\alpha = 0.89, 0.88$ で十分な内的整合性が確認された。

初経別の得点比較では、経産婦は、初産婦よりも〔母親役割の自信尺度〕得点が有意に高かった。また、2回の縦断調査のデータでは、退院時から産褥1か月時に〔母親役割の自信尺度〕得点が有意に上昇した。母親役割の自信は、児の世話や児との相互作用の経験を通して獲得されるものであり、分娩後入院中には初産婦よりも経産婦の方が母親役割の自信が高く<sup>10)</sup>、退院時よりも産褥1か月時の方が母親役割の自信が高くなるという仮説に一致する。第二次調査では第一次調査の結果よりも平均値がやや低かったのは(表4)、第二次調査の対象者は初産婦の割合が高かったためと考えられる。

〔母親役割の自信尺度〕の各下位尺度は、互いに相関が認められた。これは、産褥期の母親が母親役割の自信を獲得していくプロセスを記述した先行研究の結果<sup>1)</sup>と一致する。〔母親役割の自信尺度〕は〔母親であることの満足感尺度〕と相関が認められ、先行研究<sup>1)</sup>から導き出された概念枠組みを支持している。また、吉田らの育児不安サブスケールは、育児に伴う自信のなさや不安で構成されており<sup>3)</sup>、〔母親役割の自信尺度〕得点と負の相関を示したことは妥当な結果である。さらに、母親役割の自信に関連する要因として、「わが子の認識」、初経別、年齢、母乳栄養の確立が示された。これらは、母親役割への影響要因を明らかにした多くの先行研究の知見<sup>8)</sup>と一致する。子どもの気質は母親の育てやすさの認識に影響すると考えられる。児の合図が不明瞭であったり反応が一貫しない場合、母親は合図のよみとりと要求への応答の判断に困難を感じやすく、反対に、母子相互作用が効果的に行われていると、母親はわが子の肯定的な反応から自分の応答の有効性を確認して自信をもつようになる<sup>9)</sup>。これは先行研究<sup>1)</sup>による質的分析の結果と一致し、尺度の内容妥当性を支持している。対象の基準を広げ、その他の要因についても関連を検討していく必要がある。

## 2. 〔母親であることの満足感尺度〕について

〔母親であることの満足感尺度〕は高得点に分布が偏っていた。本研究では、マタニティブルー、早産や新生児の健康上の理由により母子分離となった場合など、母親の心理的適応に影響を及ぼすリスクがないことを対象の条件とした。本研究の対象者は医学的にも心理社会的にもローリスクで母児ともに順調に経過していることから、

本来、母親であることの満足感が高い集団であると言えるだろう。「相互作用の楽しみ」下位尺度の $\alpha$ 係数は0.58, 0.59と低かったが、第一次調査の結果では0.70, 0.84であった。項目数が少ないことや対象特性を考慮して、検討を重ねる必要がある。〔母親であることの満足感尺度〕全体では $\alpha = 0.80, 0.81$ で十分な内的整合性が確認された。また、再テスト法では $r_s = 0.70$ で安定性が確認された。

〔母親であることの満足感尺度〕得点は、初産婦と経産婦の間に有意差はなく、退院時と産褥1か月時にも有意差は認められなかった。これは、全体的に高得点に分布が偏っていたため、初経別の違いや経時的变化をとらえられなかったと考えられる。しかし一方、相互作用の楽しみと母としての自己肯定感は、児の世話技術の習熟度に関わらず体験されるものであり、初産婦でも経産婦でも、産褥早期から高値であることは妥当であろう。また、Self-Esteemは自己を肯定的に受けとめることであり、〔母親であることの満足感尺度〕とSE尺度得点が正の相関を示したことは先行研究<sup>10)</sup>と一致し、妥当な結果である。さらに、〔母親であることの満足感尺度〕は、〔母親役割の自信尺度〕と正の相関があり、本研究の概念枠組みを支持している。

## 3. 尺度の活用と今後の課題

〔母親役割の自信尺度〕は、産褥1か月頃までの母親役割の自信を測定する尺度として、一定の信頼性・妥当性が確認された。20項目の簡便な尺度であり、初産婦と経産婦の違いや産褥早期から1か月までの経時的变化をとらえることができる。〔母親としての満足感尺度〕は、一般に産褥早期から高得点に分布するため、産褥期における経時的变化や個人差をとらえるには適さないが、9項目の簡便な尺度であり、リスクケースをスクリーニングする上で有用であると考えられる。母親役割獲得過程には〔母親役割の自信〕と〔母親であることの満足感〕の要素が含まれ<sup>1)</sup>、各々の尺度の特性を考慮して適用することが重要である。下位尺度については、さらなる検討が必要である。本研究では、褥婦は心理的に不安定な状態にあることに配慮し、固定的役割観による制約感やプレッシャーを与えないような表現を用いるようにした。今後は、対象者数を増やし、産褥期の母児への看護を実践する中で尺度を洗練させていくことが課題である。

謝 辞

調査にご協力くださいました対象者の皆様にお礼申し上げます。研究施設の諸先生方と職員の皆様、母性看護学専門家の先生方に感謝致します。

引用文献

- 1) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程—母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス—。日本母性看護学会誌，5 (1)，31-37，2005。
- 2) Ramona T. Mercer: *Becoming A Mother*. Springer, NY, 1995.
- 3) 吉田弘道，山中龍宏，巷野悟郎，ほか：育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究—1・2カ月児の母親用試作モデルの検討。小児保健研究，58(6)，697-704，1999。
- 4) 奈良間美保，兼松百合子，荒木暁子，ほか：日本版Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討。小児保健研究，58(5)，610-616，1999。
- 5) 中島登美子：母親の愛着尺度日本版の信頼性・妥当性の検討。日本看護科学会誌，21(1)，1-8，2001。
- 6) 川井尚，庄司順一，千賀悠子，ほか：子ども総研式・育児支援質問紙（ミレニアム版）の手引きの作成。日本子ども家庭総合研究所紀要，37，159-180，2000。
- 7) 菅佐和子：SEについて。看護研究，17(2)，117-123，1984。
- 8) Deborah Koniak-Griffin: Maternal Role Attainment. *IMAGE: Journal of Nursing Scholarship*, 25 (3), 257-261, 1993.
- 9) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程を促す看護介入—母子相互作用に焦点をあてて—。日本母性看護学会誌，5 (1)，38-46，2005。
- 10) Ramona T. Mercer and Sandra L. Ferketich:

Experienced and Inexperienced Mothers' Maternal Competence During Infancy. *Research in Nursing & Health*, 18, 333-343, 1995.

Abstract

This study aimed to examine reliability and validity of the Postpartum Maternal Role Confidence and Maternal Satisfaction Scales that have been designed to measure perceived maternal role attainment during the postpartum period. The Postpartum Maternal Role Confidence Scale has 4 subscales and 20 items, while the Postpartum Maternal Satisfaction Scale has 2 subscales and 9 items. From a sample of 115 mothers of healthy newborns, these two scales had acceptable levels of internal consistency, with Cronbach's coefficient  $\alpha$  of 0.89-0.88 and 0.80-0.81, respectively. The Maternal Role Confidence Scale score at 4 weeks postpartum was significant higher than at 5 days postpartum, and parity differences were also demonstrated ( $p < 0.01$ ). The Maternal Satisfaction Scale had stability across postpartum period. Concurrent validity was supported as the scales had positive correlation with a Self-Esteem scale, and a negative correlation with a scale related to anxiety about childrearing. Construct validity evaluated based on the conceptual framework of maternal role attainment, supported by the correlation between the scales was 0.51-0.59, the subscales 0.34-0.72; showing that the scales had reliability and validity. However, further improvement is still needed.

**Key Words:** maternal role, postpartum, scale, reliability, validity